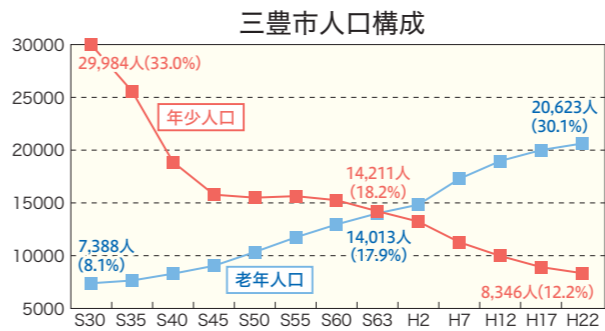


市長の市政報告

三豊市長 横山忠始

時代はこの瞬間も進み続けており、私たちの住む社会も止まることなく変化し続けています。そして、今日の日本社会は、35年程前の高度成長期と言われた昭和50年頃の社会とは、全く別の超少子高齢化社会になっています。変化する社会に、どんな新しい地域づくりモデルで対応していくか、私たちに問われています。



増え続ける福祉ニーズ

今、私たちは増え続ける高齢者、減り続ける子どもという超少子高齢化社会にいます。三豊市では65歳以上の老年人口が、15歳未満（中学校3年生以下）の年少人口を追い抜いて、その差をさらに広げています。私たちは人類史上初めて

なると思われれます。

税金でするのか 自分たちでするのか

三豊市では、その時に向けて職員数も合併時に955人いた職員を現在743人と212人削減してきました。さらに平成27年度末にはあと57人削減して686人にする予定です。

しかし、幼稚園・保育所・学校・給食調理場・火葬場・三観広域消防署・市危機管理センター等、新時代のニーズに応え、建て替えを進める来年度からは財政運営が厳しくなり、再来年度は合併後初めての、プライマリバランスの赤字が予想されます。そして、しばらく赤字は続かざるを得なく

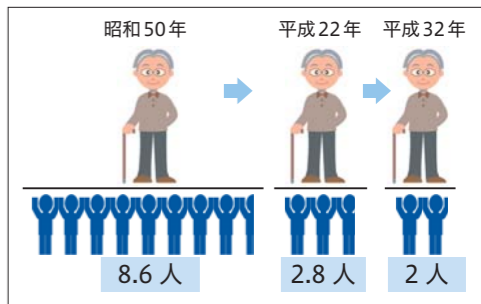
	市民一人当たりの延床面積
三豊市	5.29㎡
類似団体	4.90㎡
県内他市	3.92㎡
全国市区町村	3.42㎡

私は7年前、「支所も市役所を重視していくマニフェストを皆さまに提示しました。しかし、7年の間に

の未知の世界、「超少子高齢化社会」を歩いています。本市の介護認定者数をみると、平成18年3,098人から平成24年3,944人へと増加し、介護保険特別会計は、平成18年度には約48億円だった支出が、平成24年度は約68億円と、6年で20億円も増加しています。医療も含め、高齢者福祉ニーズは拡大する一方で

子供は減少しているのに、核家族化と働く女性の増加により、保育所ニーズは増え続けており、また放課後児童クラブの希望者数も急増しています。超少子高齢化に伴う高齢者の介護・医療、若い世代の子育て支援と、福祉対応の財源はそのままいくとありません。「今まで」を継続しながら、さらに積み上げていける財源は、どこにもありません。「今まで」を一旦終わらせて「今から」を創り上げていく！それくらいの決意が今、私たちに求められています。

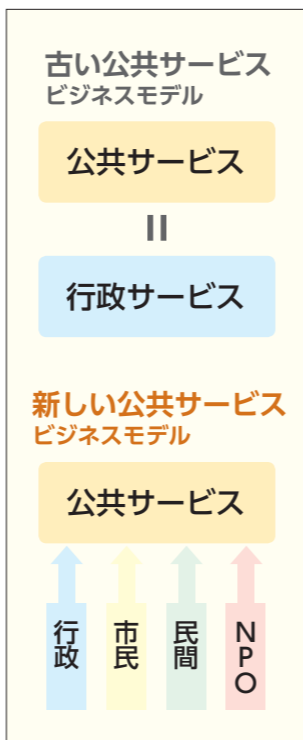
全国 高齢者1人を支える生産年齢人口数



多すぎる公共施設

三豊市は、7つの町が合併しましたので、類似施設も多く、公共施設は、466もあります。その年間維持費は、なんと約36億円かかっています。今後、同じように建て替えるならば、40年かけても約1,200億円の費用が必要となり、とても不可能です。

「公共施設ができれば発展している、公共施設は利用が無料」という考え方は、昭和50年頃の価値観です。公共施設の運営は、市民全



前記のような変化が起きてきましたので、地域コミュニティを充実させていくという考え方は変わりませんが、少し手法を変えさせていただきます。

すべて税金ですることから、自分たちでできることは自分たちでするという、古くて新しい手法への変化です。

「公共サービス」|| 「行政サービス」の時代は終わりました

今からの時代は、「公共サービス」とは、すべて町役場が提供してきた「行政サービス」であるという昭和50年代のモデルに別れを告げ、超少子高齢化社会の新しいモデル、つまり公共

ちづくり推進隊については、今後、改めて詳しくご報告いたしますが、財源のない中、こうせざるを得ないこともありますが、この方が今の時代の閉塞感を打ち破り楽しいものになります。

終着駅は始発駅

「終着駅は始発駅」という随分昔に流行った歌があります。

私たちは今、昭和50年モデルの終着駅にいるのと同じ時に、今からの時代への始発駅にすることが分らないで、閉塞感に包まれていくように思われます。

今、私たちは新しい時代「田園都市みとよ」へ向かっての始発駅にいます。今までの線路にこだわり、昨日を懐かしむのではなく、勇気と好奇心をもって新しい希望の「田園都市みとよ」づくりに向かって始発駅を出発しましょう。

寒さ厳しい折、皆さまのご自愛をお祈り申し上げます。

三豊市放課後児童クラブ登録者数の推移

